

vol.1

わたしと
あなたのことです。

過去から現在、
現在から未来へと
つながって
いきます。

わたしたちが
自覚する以前から、
つながっています。

く結ぶ絆から、
広がるご縁へく

誰もがつながって
いけることです。

わたしたちが認識して
いる以上に、遠くまで
広がっています。

わたしはあらゆる
ものにつながって
います。

ごえん



わたしがここに
存在していること
そのものです。

人と人をつなげる
不思議な
めぐりあわせです。

わたしと仏さまの
ことです。

わたしの
いのちを
支えている
ものです。



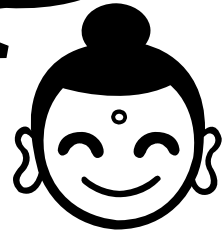
浄土真宗本願寺派(西本願寺)では、あらゆる人々が
自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現に
貢献する活動として、「御同朋の社会をめざす運動」
(実践運動)を推進しています。

詳細はホームページ (<http://www.hongwanji.or.jp>)
などをぜひご覧ください。

【目次】

はじめに	2
①「ごえん」 人と人を結びつける不思議なめぐりあわせです。 ～不思議～	4
②「ごえん」 わたしたちが自覚する以前から、つながっています。 ～光明のはたらき～	6
③「ごえん」 わたしたちが認識している以上に、遠くまで広がっています。 ～ご縁の広がり～	8
④「ごえん」 過去から現在、現在から未来へとつながっていきます。 ～受け継がれていくご縁～	10
⑤「ごえん」 誰もがつながっていけることです。 ～あらゆる世界に生きるものへ～	12
⑥「ごえん」 わたしとあなたのことです。 ～いのちを共にする～	14
⑦「ごえん」 わたしと仏さまのことです。 ～切れることのないご縁～	16
⑧「ごえん」 わたしのいのちを支えているものです。 ～食事のことばかり～	18
⑨「ごえん」 わたしがここに存在していることそのものです。 ～無常という真理～	20
⑩「ごえん」 わたしはあらゆるものにつながっています。 ～かけがえのない私～	22
もっと知りたいご縁のこと 「結ぶ絆から、広がるご縁へ」 「ご縁」と「縁起」（仏教の根底を成す思想／日本での浸透） 「業縁」	24

はじめに



ある日の、お父さんと娘さんの会話から。

お父さん 「<ご縁^{えん}>って言葉を知っているかい？」

娘 「何か、聞いたことあるような、ないような・・・おばあちゃんが、よく言ってるような気がする」

お父さん 「若い人は、最近使わなくなったようだね。でも、縁^{えんむす}結びという言葉は、知っているだろう？」

娘 「うん。彼との縁結びを、お願いに行こうと思っているよ」

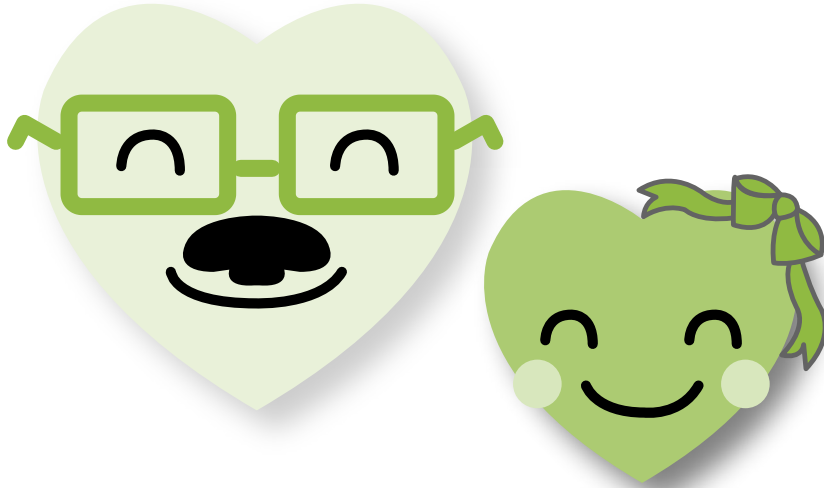
お父さん 「え、もう彼氏ができたのか!？」

娘 「お父さん、まだ、これから探すところだから、安心して」

お父さん 「おどかすのは、やめてくれよ。ただ、縁を結ぶというのは、もともと<結縁^{けちえん}>といって、人間同士ではなく仏さまとの<ご縁>のことなんだよ」

娘 「え、そうなの。全然知らなかった」

お父さん 「そうだよ。辞書で<結縁>を調べてごらん」



娘 「あ、ほんとうだ。最初に＜仏道に入る縁を結ぶ＞って書いてある。びっくり！」

お父さん 「もう一つ質問するよ。じゃ、どうしたら、私たちが、仏さまと縁を結ぶことができると思う？」

娘 「えっと・・・それは、私がお寺に行って、お賽銭を入れるからとか？」

お父さん 「お金が縁を結ぶということかい？ そうじゃないんだ。そもそも、仏さまは、私たちが気付かない時も、ずっと私たちのことを心配してくださっているんだよ。その思いが、もうおまえに届いているから、それを受けとめるのが、仏さまとご縁を結ぶということなんだ」

娘 「へえ～。じゃあ、今はまだ、私と一緒に、仏さまの片思いなんだね」

お父さん 「そうだね」

娘 「仏さまが、どんなふうに心配してくれているのか、知りたくなってきたわ」

この冊子では、仏教が大切にしてきた「ご縁」という言葉を、10章に分けて、考えてみようと思います。

①

「ごえん」
人と人を結びつける
不思議な
めぐりあわせです。



～ 不 思 議 ～

私たちには、さまざまな縁(原因)がはたらいています。そして、そのことを、知り²尽くすことができません。今、ここで起きている事柄は、数え切れない無限の原因が積み重なった結果です。私たち人間の浅はかな考え方では、到底、理解し尽くすことができません。

一方で、因果関係^{いんが}でものを見ることは、私たち人間に特徴的な思考方法でもあります。しかし、私たちには、本当の因果関係を正しく見極めることができず、自分の都合で因果関係を見てしまいます。これは誤った認識であり、それによって誤った行為が生み出され、悲しみや苦しみの要因ともなります。

縁起を見ぬくことができず、自己中心的な考えで、結果に対して誤った原因を見てしまう私たちは、仏さまに出あい、その智慧をともしびとしなければ、私自身をきちんと見つめることさえできません。

仏さまが示された「縁起」とは、物事の正しい因果の理のことです。この教えをよりどころとして、思い込みや自己中心的な因果関係を見てしまわないよう、常に注意しなければなりません。

あなたと私も、そして仏さまと私も、人間のはからいでは知り尽くせない多くのご縁でつながって、不思議なめぐりあわせがあって、ここに出あっているのです。

「ごえん」
わたしたちが
自覚する以前から、
つながっています。



～光明のはたらき～

そで ふ たしょう
「袖振り合うも多生の縁」(※1)という言葉があります。「多生」を「多少」と
書き間違える人もいますが、「多生」でなければ、この言葉の正しい意味には
なりません。往来で行き交う人の着物の袖先が、軽く接するようなささやか

な関係であっても、何度も生まれ変わる中で生じた貴重な縁であることを意味しています。

しかし、長い時間の中で育まれたご縁であることを意識することは、なかなか難しいことです。直接的な原因について思いをめぐらすことはできても、遠い過去からの原因を自覚し続けることは本当に困難です。

親鸞聖人(※2)は、『教行信証』(親鸞聖人の主著)の「総序」で、

あゝ、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。

たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ(『註釈版聖典第二版』132 頁)

と仰っています。阿弥陀さま(※3)からの願いである大いなる本願は、いくたび生を重ねてもあえるものではなく、まことの信心はどれだけ時を経ても得ることは難しい。思いがけず、真実の行と信(※4)を得たなら、遠い過去から、阿弥陀さまの光が、育み続けてくれていたご縁を感謝しよろこぶべきであると、親鸞聖人はお示しくださっています。

私たちは、心配し続けてくれている人、願い続けてくれている人がいても、当たり前のようにそのことに気付かなかったり、ついつい忘れてしまったりしています。そうした縁が途切れた時、心配してくれていた人がいなくなった時に、やっと、その大切さに気付くということも少なくありません。

阿弥陀さまの光明は、私たちの気付かない遠い過去から、すべての人々を照らし続けています。そのことが、貴重なご縁となって、今、救いに出あっているのです。

※1 「袖振り合うも多生の縁」は、「袖すり合う」「袖触れ合う」「他生の縁」といった表現のものもあります。

※2 「親鸞聖人」 浄土真宗の宗祖、1173-1263

※3 「阿弥陀さま」 浄土真宗のご本尊、阿弥陀如来(南無阿弥陀仏)

※4 「行と信」 仏教一般では、行はさとりに至るための修行を意味しますが、浄土真宗では、浄土往生の行は信と同じく阿弥陀さまより衆生にふり向けられ、あたえられたものとして、大行といわれます。

③

「ごえん」
わたしたちが認識して
いる以上に、遠くまで
広がっています。



～ ご縁の広がり～

質問です。名前しかわからない、全く見も知らぬ遠くの人へ手紙を届けなくてはなりません。何人を仲介すれば、目的の人に、その手紙は届くでしょ

うか？

これは、アメリカで 1960 年代に実際に行われた実験です。1600 キロ離れた土地に住むビジネスマンに、自分より関係の深そうな方に手紙を渡すという方法で、人づてに手紙を送ろうとします。すると、平均して、たったの 6 人を介するだけで目的の人物に届くのです。これはアメリカ国内での実験でしたが、2002 年には、世界規模で同様の実験を行いました。すると、やはり同じく 6 人で届いたそうです。

私たちは、広い世界の中で、ばらばらに生きているように思いがちです。遠くにいる人であれば、全く無関係に生きているように感じてしまいます。しかし、誰もが、たった 6 人を通してつながり合っていける世界、「スモールワールド」に生きているということを、これらの実験は証明したのです。インターネットが急速に発達している現代では、世界は、さらに小さなものになっていくことでしょう。

しかし、私たち人間は、私と外の世界を切り分けて認識する習慣を持つため、つながりを断って、世界を認識してしまいがちです。それによって、自己中心的な視点に縛られ、自己へのとらわれから離れられなくなり、つながっていても、また、つながる可能性があっても、そのことを自覚することができないでいます。個別に独立した存在として切り離された関係をつくり、お互いに、ねたみ、怒り、非難の心で見えてしまうのが、私たちのありさまなのであり、疎外される人々を生み出す私たちの社会のありのままの姿です。

遠い、近いという感情は、私たちの心がつくり出すものです。自他を隔てることのない仏さまの智慧を鏡とするとき、自己のとらわれから離れられない私たちに、分別するあり方を省みて、互いにつながりあっていける可能性が、開けてくることでしょう。

「ごえん」
過去から現在、
現在から未来へと
つながっていきます。



～受け継がれていくご縁～

吐く息が白くなるような寒い冬の日、暖かなお風呂に入ると、「あ～ありがたいなあ」と思わず声が漏れることがあります。「ありがたい（有り難い）」と

は、「有ることが難^{むずか}しいこと」、つまり極めてまれなことに感謝をする言葉です。もちろん、お風呂に入ったときだけではありません。仕事や恋愛など日常生活の中で直面するさまざまな困難の中で思わぬ支えに出あったとき、口に出さなくても私たちはありがたさを心から実感することがあります。

さて、お釈迦さまから始まった仏教の教えは、約 2500 年の時を経て、現代にまで受け継がれてきました。しかし、その歴史は決して平坦なものではありませんでした。中でも仏教が国家に受容された中国・日本などの東アジアでは、いくたびかの深刻な弾圧や迫害^{だんあつ はくがい}によって、その教えが途絶えそうになったことが多くの歴史書に記されています。そうした困難の中で仏法をなんとか伝えようとしてきた人々がいたからこそ、私たちは今、その教えに出あうことができているのです。

親鸞聖人は、法然聖人^{ほうねんしょうにん}（※1）など自らを導^{みちび}いてきた人々の教えを通して阿弥陀さまの救いに出あえたことをよろこび、ご著作の最後に、次の言葉を引用されています。

前^{まえ}に生れるものは後^{うま}のものを導^{あと}き、後^{みちび}に生れるものは前^{あと}のもののあとを^{うま}尋ね、果^{まえ}てしなくつらな^{たず}って途切^はれることのないようにしたいからである。^{と ぎ}

（『教行信証』化巻、『現代語版』646 頁）

ここには、み教えを伝えてくれた先人への感謝と共に、自らも途切れることなく人々に伝えていこうとする親鸞聖人の決意をうかがうことができます。過去から現在へと多くの困難の中でみ教えを伝えてきた方々の「有り難い」ご縁の積み重ねによって、今、私たちが阿弥陀さまの教えに出あうことができているのです。私たちの手によって、未来へとその教えをつなげていきたいものです。

※1 「法然聖人」 浄土宗の宗祖、親鸞聖人の師、1133-1212

5

「ごえん」
誰もが
つながっていき
る
ことです。



～あらゆる世界に生きるものへ～

毎年お正月になると、初詣の参拝者で多くの神社や仏閣はにぎわいます。中でも、若者たちに人気なのが、「縁結び」の御利益ごりやくです。「今年こそは素敵な人と出あいたい」と、「良縁成就」りょうえんじょうじゅのお守りを求めて長蛇の列ができる風景は、この時期の風物詩といえるでしょう。このように、私たちが求める「ご縁」は、「悪い縁」をとりのぞき、「良い縁がほしい」「自分の思い通りの異性が見つければ良い」という思いが反映された、いささか都合の良いものであることが多いようです。

しかし、私と仏さまとのあいだにある「ご縁」は、こうした私たちが求める「縁結び」とは、全く違うものです。曇鸞大師どんらんたいし（6世紀に活躍した中国の僧）は、慈悲じひについて述べる中で、阿弥陀さまの慈悲を「無縁、これ大悲なり」むえん だいひ おうじょう（『往生ろうんちゆう論註』上巻、『註釈版聖典七祖篇』62頁）と示しておられます。「無縁」とは、仏教では「つながりがない」という意味ではなく、「特定の対象（縁）を選ぶのではない」ことを意味します。つまり、阿弥陀さまから結ばれた私との「ご縁」は、どのような者に対しても向けられる大悲いつく（私たちを慈しむ心）のはたらきそのものなのです。このことが、『仏説無量寿経』ぶつせつ むりょうじゅきょうには「十方衆生を救う」と誓われています。十方衆生じっぽうしゅじょうとは、あらゆる世界のいのちあるものという意味です。

阿弥陀さまの普遍の救いに出あうとき、自分中心の世界に生きていた私が、仏さまにつながっている世界、仏さまの慈しみに包まれている世界の中にあると、気付かされていくのです。縁のよしあしを気にして思い悩む私たちに対して、阿弥陀さまの方からすでに、全ての者に対する「ご縁」が結ばれています。この仏縁を通して、私たちが、互いに阿弥陀さまの大悲に等しく包まれているもの同士であったことが知らされていくのです。

「ごえん」
わたしと
あなたのこと
です。



～いのちを共にする～

ぶっせつ あ み だ きょう
『仏説阿弥陀経』の中に、ごくらくじょうど
極楽浄土にいる鳥として「ぐみょう共命の鳥」の名が見えま
す。「共命の鳥」とは、胴体は一つなのに、頭が二つあるので「共命」といいま
すが、この共命の鳥については、次のようなエピソードがあります。

鳥は木の実を餌^{えさ}としていますが、ある共命の鳥は、一方の頭の方だけが、いつもおいしい木の実を先に食べ、もう一方の頭の方は、いつも残りものの木の実を食べていました。いつも残りものばかりになっている方が、そのことを不満に思っていたために、



ある時、毒の木の実を見つけた時、「おいしそうな木の実がある」と言いました。こう言えば、必ずもう一方の方が、横取りして、毒の入った実を食べ、苦しむだろうと思ったのです。予想通り、さっさと横取りして、毒の実を食べ、苦しみ始めました。「やった。ざまあ見ろ」と喜んでいたところが、胴体はつながっているのです、もう一方の方にも毒が回って苦しんだという話です。

私たちは、この鳥を「愚^{おろ}かだ」といえるでしょうか。私と他人とのつながりを忘れ、「自分が」、「自分が」と我を張っています。私と他者とのつながりを忘れて、自分ばかりを主張するから、互いにぶつかり合うことになります。それを、仏教の言葉で「我^が他^た彼^び此^し」というのです。

自分のことだけ主張すれば「ガタピシ」と不快な音を立てます。かといって、自己中心的なあり方から離れることが簡単にできるわけではありません。自己主張してガタピシと音を立てるのが私たちのありのままの姿であり、互いに主張し、話し合い、論争し、そうやってつくられていくのが私たちの社会です。

しかし、「ご縁」という見方があれば、共命の鳥のように、いのちを共にしているものであると知らされて、ただぶつかり合うだけの愚かさを知り、互いの意見を尊重し、許し合い支え合う「共に」の社会をつくっていく思いが生まれてくるのではないのでしょうか。

「ごえん」
わたしと
仏さまのこと
です。



～切れることのないご縁～

毎年お正月になると、年賀状を送ります。しかし、せっかく送った年賀状が、「宛先不明」で返ってくることがあります。どこかへ引っ越しされたのか、お

亡くなりになったのか……。原因はわかりませんが、返ってきた年賀状を見て、寂しい気持ちになった経験を持つ方も、多いのではないのでしょうか。大切なご縁であっても、ふとしたことで失われてしまうのが、私たちが生きている人間世界の関係です。

それは、親子や夫婦といったかけがえのない大切な縁であっても、変わることはありません。なぜなら、「死別」^{しべつ まぬが}を免れることはできないからです。『仏説無量寿経』には、独りで生まれ、独りで死んでいくとあります。人間は、生まれるときも死ぬときも独りであるというこの言葉には、生死のもたらす別離^{べつり}の悲しみが示されています。

親鸞聖人は「人間の八つの苦しみ(※1)の中で、愛別離苦^{あいべつりく}が、もっとも痛切なものである」と仰ったと『口伝鈔』^{くでんしやう}に伝えられています。八つの苦しみの中には、自分が老いること、死んでいくことの苦しみも含まれますが、そうした苦しみよりも、慈しみ合っているもの同士が別れていくことほど、悲しく切ないものはないと仰っているのです。この言葉からも、大切な縁が切れてしまうことの痛みの大きさが、あらためて実感されます。

そのような私たちに対して、阿弥陀さまの救いは、決して断ち切れることがない縁として届いています。はるか昔から、そして今も、未来も、^{せつしゆふ}「摂取不捨」^{しゃ}(救い取って決して捨てない)として、すべてのいのちあるものの^{もと}元に、阿弥陀さまの光は届いています。この誰もがつながっていける、途切れることのない阿弥陀さまからのご縁をいただいていくことを、「信心」というのです。そして、信心をいただいた私たちは、お浄土に生まれ、仏となって、ご縁のあった人々との間に、永遠のつながりを結ぶことができるのです。

※1 「八つの苦しみ」は「八苦」といい、生・老・病・死^{しやう ろう びやう し}の四苦に愛別離苦^{あいべつり}、怨憎会苦^{おんぞうえく}(怨み憎むものとあう苦しみ)、求不得苦^{くふとく}(求めて得られない苦しみ)、五蘊盛苦^{ごうんじやうく}(私たちの生存そのものの苦しみ)の四つを加えたものです。

「ごえん」
わたしのいのちを
支えているもの
です。



～食事のことばから～

私たちは食前に何も意識せずに「いただきます」という言葉を発します。しかし、近ごろは「いただきます」、「ごちそうさま」の一声さえ出なくなってい

なげ
ると嘆く声も聞かれます。

浄土真宗本願寺派は 2009 年 11 月に新しい「食事のことば」を定めました。

【食前のことば】

- 多くのいのちと、みなさまのおかげにより、このごちそうをめぐまれました。
- 深くご恩を喜び、ありがたくいただきます。

【食後のことば】

- 尊いおめぐみをおいしくいただき、ますます御恩報謝ご おんほうしゃにつとめます。
- おかげで、ごちそうさまでした。

この【食前のことば】の「多くのいのち」という表現には、多くの動植物のいのちをいただかなければ生きていけない私たちのあり方への「慚愧ざんき」の思いが込められています。また「みなさまのおかげ」という表現には、食事に携わる人々のご苦勞に対する「感謝」の思いが込められています。

【食前のことば】は、食事が空腹を満たすだけではなく、食事というめぐみを通して、私たちのいのちを支えているものへの「ご縁」を知らせていただく機縁となるでしょう。

このように多くのいのちによってめぐまれた私の人生ですから、ご報謝させていただく決意が生まれます。それが【食後のことば】です。

もちろん、食事だけではありません。普段、私たちは何気なく生活していますが、その一つひとつを「ご縁」というまなざしから見れば、そこに多くの「おかげ」「ご恩」があり、私のいのちが支えられていることが見えてきます。

「ご縁」を見る習慣が身につくと、何も思わずにご飯を食べることができなくなるかもしれませんね。

9

「ごえん」
わたしがここに
存在していること
そのものです。



～ 無常という真理～

砂場で、幼い子どもが、時の経つのを忘れて、砂山を作って遊んでいるのを見かけることがあります。

大地、砂つぶ、子どもの作業、これら一つひとつが原因(縁)となり、砂山ができあがります。この中の一つの原因が欠けても、砂山はできません。そして、やがて風が吹き、雨が降り、時間が経過して、砂山は崩れていきます。色々な原因(縁)によって、形を変えていくのです。

いくつもの縁によって生まれ、また縁によって変化し続け、やがて元の形が無くなっていくありようを「無常^{むじょう}」といいます。このように、「縁」と「無常」とは一对の言葉なのです。

多くの縁によって、この世に生を受けた幼子も、砂山が崩れて元の砂つぶに戻っていくように、やがては臨終^{りんじゅう}の時を迎えなければなりません。だからこそ、急ぎ、仏とならせていただく仏縁をいただかなければならないのです。

お釈迦さまは、「縁起」こそが真理であると説かれました。この世に生まれてきた者は誰も、「縁起」と「無常」の世界を免れることができません。なぜなら、私たちの存在そのものが、「縁」でできた「無常」なものだからです。親鸞聖人は「火宅^{かたく}無常の世界」と、「無常」について表現されました。私たちが生きるこの世は、燃えさかる家のように、たちまちに移り変わる世界なのです。やがては、この世での縁が尽き、終わりを迎えなければならぬのが私たちのありさまなのです。

そんな無常な私たちだからこそ、いつでも、どこでも、はたらいてくださっている阿弥陀さまの慈悲によって、仏とならせていただく。その教えに今、出会い、存在の根底から阿弥陀さまの慈悲の中で生きていくことが、何よりも大切な救いとなるのです。

「ごえん」
わたしは
あらゆるものに
つながっています。



～ かけがえのない私～

「僕は誰からも必要とされていない。私なんていなくてもいいんじゃないか……」

学校や職場で、こうした思いを持つ方は、決して少なくないのではないのでしょうか。最近では厳しい就職活動の中で自分の存在そのものが否定されたように感じ、自らのちを絶つ学生がいることも報道されています。「あなたの代わりはいくらでもいる」などのように、取り換え可能な人間と言われることほど、「生きる意味」を失う体験はありません。まさに私たちは、「誰かにとって大切な存在であること」によってはじめて、「自分の大切さ」が実感できるのです。

仏教には、「インドラの網」という有名なたとえがあります。インドラとは古代インドの神様であり仏教では帝釈天^{たいしゃくてん}という名で知られています。その宮殿^{かざ}を飾っている網の結びめの一つひとつには宝珠^{ほうしゅ}が結わえられており、それらがちょうど合わせ鏡のように互いに互いを映し合い、どれか一つの宝珠をとりあげれば、そこにはその他すべての宝珠の姿が映し出されているというのです。

自分の顔は、鏡に映して見ることができるように、私自身の姿についても、自分で気付くより、他者の存在を通して知られるということがしばしばあります。同様に、他者にとってもまた、他ならない私の存在が大きな意味を持っています。このように、あらゆる存在が互いに関わり合いながら形づくられている究極的な縁起の世界こそが、私たちが生きているこの世界なのです。今、生きているこの私こそが、実は「すべての存在にとってなくてはならない、大切な私」であることを、仏教は伝えています。

もっと
知りたい
ご縁
のこと



「結ぶ絆から、広がるご縁へ」

浄土真宗本願寺派は、「御同朋^{おんどうぼう}の社会をめざす運動」のスローガンに、「結ぶ絆から、広がるご縁へ」という言葉を掲げております。
「絆^{きずな}」とは、もとは「馬などをつないでおく綱」の意味で、人が結ぶつながりのことです。この人と人との結びつきは、確かに大切にかけがえのないものですが、一方で、人間の思いや好意によるつながりは、どこまでも不確かなものでしかありません。このように人間の分別的な知の世界に「つながり」を限定させるなら、私たちの社会が抱える深い闇、大きな悲歎^{ひたん}を人間の根源的なところから克服^{こくふく}していく原理としては、不十分でありましょう。

一方、「ご縁」とは、人間が^{さく い}作為的につくり出すつながりを意味する言葉ではありません。それは、すべての物事が互いに関わり合っ
て存在していること、あらゆる存在が無限の過去から関連し合い
ながら現在にいたっていることを示しています。ご縁とは、人間は
^{り こ}利己的なあり方を離れ難い存在であるという^{ないせい かん き}内省を喚起し、
根源的な無力さを実感させながら、それだからこそ他者と
つながり合っていくあり方を開いていき、生きる力を再生させます。

スローガンに「結ぶ絆から、広がるご縁へ」を掲げるのは、あらゆる
ものが縁起し合っているという視点に立って、この運動を進め
たいという願いが込められているからです。

宗門は、「阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝え、もって自他共に心豊
かに生きることのできる社会」をめざしています。この宗門の根本
的な理念を実現していくために、「御同朋の社会をめざす運動」を
展開していきます。

「ご縁」と「縁起」

仏教の根底を成す思想

「ご縁」は、お釈迦さまが説いた大切な教えである「縁起」に由来する言葉です。

お釈迦さまはさとりを開かれ、その後45年間にわたりさまざまな教えを説かれましたが、その教えの根本が「縁起」であるといわれています。お釈迦さまは、人が生まれ、老い、病み、やがて死にいたるという苦しみの原因を探っていき、その原因が人間の根本的な欲望や愚かさであることを見いだしました。そのうえでその愚かさが生み出す苦悩を、「智」によって解放していく道を示されたのです。

お釈迦さまのさとりは、苦しみの原因を、時間をさかのぼって観察することで得られた境地であり、もともと「縁起」は、時間的な経過の中での原因と結果の関係を意味していました。しかし、後の時代になると、あらゆる存在は、他のものとの関係の中で存在するという、相互の依存^{い ぞん}関係を意味するようにもなりました。つまり、「縁起」とは、私たちには見極めることが困難なものですが、宇宙のあらゆるものは時間的にも、相互の関係としても、結びつき合って存在しているのであり、バラバラに存在しているようであっても、個別に単独で存在しているものはないという、この世界の真実のあり方を示す思想を表現する言葉になりました。

ですから、時間的なつながりと、互いの存在が同時的につながり合っているという、二つのつながりに私たちの存在を規定するとともに、仏教徒として生きる道を明らかにする奥深い原理が、この短い「縁起」という言葉に集約されているのです。

日本での浸透

とりわけ、日本に仏教が伝来して以来、この「縁起」の「お互いに関連し合う」という考え方が大切にされてきました。そのことが「縁」に「ご」をつけて「ご縁」という表現になり、江戸時代には、浄土真宗の法話などでも、たびたび用いられてきました。その後、「ご縁」は、日本社会に広く浸透し、日常でしばしば用いられる言葉となり、「多くのご縁によって生かされている」という見方が^{つちか}培われてきたとみられます。

親鸞聖人が「^{とお}遠く^{しゆくえん}宿縁を^{よろこ}慶べ」と述べられるところにも、仏法に出あい、阿弥陀さまのみ教えに導かれる身となったことを、遠い過去からのばかり知れない「ご縁」によって与えられ導かれてきたとよろこばれているお姿、すなわち「縁起」の理念のもとに、「ご縁」をこよなくよろこばれているお姿があらわれています。

さらに、親鸞聖人は、阿弥陀さまの救いを「弘誓ぐ ぜいの強縁ごう えん」と讃たたえられ、
「光明名号こう みょう しょう顕因縁けん いん ねん」と、阿弥陀さまのはたらきが、私たちの救いの「因であり縁である」と示されました。私たちの救いのすべてが、他力であるとお示しになったのです。

「業縁」

「業縁^{ごうえん}」という言葉も使われます。「業^{ごう}」(karman)とは、行いを意味しています。インドでは、お釈迦さまの生まれる前から、輪廻^{りんね}思想の中で、善い行いをすれば楽な世界に生じ、悪い行いをすれば苦しみの果があるとする因果^{おうほう}応報の考え方があり、宿命^{しゆくめい}論的な意味合いが強く、インドにおける差別的な身分制度の思想的背景になってきました。しかし、お釈迦さまは、物事は一つの原因によって生じるようなものではなく、また、多くの原因によって常に移り変わり、固定的で変わらぬ私自身は無^{しよぎょう むじょう}いという「諸行無常」・「諸法無^{しよほう む}我^が」の教えを説き、「業」に関する宿命論的な見方を否定されました。仏教の縁起の体系はそのお釈迦さまのお心を根拠とするものであり、親鸞聖人もその心を継承していきました。

しかしその後、お釈迦さまが否定したにもかかわらず、現実の事態を個人の過去世に責任を負わせる考え方とし、「過去からの業によって差別を受けるのはしょうがない」といった諦め^{あきら}の論理として、「業」を利用してきた歴史があります。

さらに、親鸞聖人が『歎異抄』^{たん にしょう}で「さるべき業縁^{ごうし}のもよほさば、いかなるふるまひもすべし」と言われたと伝えられるお言葉は、聖人の深い自己凝視^{ぎょうし}と、真実のありようが人知^{じんち}を超えていることを嘆じられたものであるにもかかわらず、この言葉をも私たちは差別の現実を諦めさせていく論理として使用してきた歴史的事実を有しています。

これらの反省に立ったうえで、仏教の根本の教えである「諸行無常」・「諸法無我」そして「縁起」といった考え方を改めて問い直すとともに、自己を深く内省^{ないせい}し、一人ひとりが抱える課題^{しんし}に真摯に向き合っていくことを行動へつなげたいと思います。

ご縁の中に生かされているという真実の教えを根底として、自
他共に心豊かに生きることのできる御同朋の社会をめざしていき
ましょう。



編集・発行：浄土真宗本願寺派総合研究所、重点プロジェクト推進室

印刷：大日本印刷株式会社



「御同朋の社会をめざす運動」（実践運動）スローガン

結ぶ絆から、広がるご縁へ

—From tying bonds to great encounters—